

音楽的化粧水レートソプラと永井郁子
～1929年秋の演奏旅行を考える～

津 上 智 実

**Beauty Lotion 'Lait Sopra' and NAGAI Ikuko:
An Investigation of her Concert Tour in the Fall of 1929**

TSUGAMI Motomi

Abstract

In the ‘Movement for Singing in Japanese’ (1925–1941) led by soprano singer NAGAI Ikuko (1893–1983), the performance tour in the fall of 1929 stands out, in that it was tied up with Lait White Powder Cosmetics, run by HIRAO Sampei Shōten, Ltd. The purpose of this paper is to clarify its details and to consider its social significance.

As a result of this survey, it has become clear that she gave eleven recitals in late September: four in Tokyo, one in Yokohama, four in Osaka, one in Kobe, and one in Kyoto; and twelve recitals in mid–November: one in Nara, one in Wakayama, one in Okayama, two in Takamatsu, one in Matsuyama, one in Hiroshima, three in Fukuoka, one in Kumamoto, and one in Oita. Every concert drew a large audience.

These concerts were held to promote the release of the new beauty lotion “Lait Sopra”, and the catchphrase “Soprano for your ears and Sopra for your hands” was also used. This was presumably propagated nationwide through the network of cosmetics stores and Lait customers associations in various regions, while making heavy use of newspaper advertisements.

Although classical concerts sponsored by cosmetics companies flourished in Japan in the 1970s, Nagai’s were extremely pioneering examples, taking place as early as in 1929.

Keywords: NAGAI Ikuko, Lait Sopra, HIRAO Sampei Shōten, Ltd,
Movement for Singing in Japanese

要 旨

ソプラノ歌手の永井郁子（1893～1983）が展開した邦語歌唱運動（1925～1941）において、レート白粉本舗平尾賛平商店とタイアップして行った1929年秋の演奏旅行は一際異彩を放っている。その実態を明らかにすると共に、その社会的な意味を考えることが本稿の目的である。

調査の結果、9月下旬から東京（4回）、横浜、大阪（4回）、神戸、京都の計11回、11月中旬に奈良、和歌山、岡山、高松（2回）、松山、広島、福岡（3回）、熊本、大分の計12回、と合わせて少なくとも23回の独唱会を実施し、どの会場も大入りであったことが明らかになった。

これは新化粧品「レートソプラ」の発売記念行事として行われたもので、「お耳にソプラノお手にはソプラ」のキャッチフレーズも用いられた。新聞広告を多用しながら、各地の化粧品店とレート会の顧客のネットワークを通じて全国展開したものと理解される。

化粧品会社による冠コンサートが日本で盛んになるのは戦後の1970年代であり、1929年という突出して早い時期に行われた平尾賛平商店によるこれら一連の独唱会は、極めて先駆的な例と位置づけられる。

キーワード：永井郁子、レートソプラ、平尾賛平商店、邦語独唱会

0. はじめに

ソプラノ歌手の永井郁子（1893～1983）は邦語歌唱運動を提唱して、1000回に及ぶ独唱会を15年半（1925～1941）に亘って当時の植民地を含む日本全国で実施したが（津上 2018, 2019a, b, 2020）、中でも一際異彩を放っているのが、化粧品会社のレート白粉本舗平尾賛平商店とタイアップして展開した1929（昭和4）年秋の演奏旅行である。その実態をできるだけ明らかにすると共に、その社会的な意味を考えることが本稿の目的である。

1. 際立つ広告

1929年9月17日（火）付『東京日日新聞』第19066号2面に掲載された4段抜の演奏会告知「永井郁子女史邦語独唱会」の広告（図1）は驚くべきものである。そこには、9月21日に早稲田大学大隈会館、9月22日に青山会館、9月23日に丸の内報知講堂、9月24日に本所公会堂、9月25日に横浜会館で、すなわち東京と横浜の主要会場で5日連続で独唱会を開催する旨が告げられている。これらはいずれも大きな会場で、順に2200席、1800席、1000席、938席、1800



図1：5日連記の広告

席を有している¹。5日間で8000人近い聴衆を動員できる日本歌曲の歌手というの、現在の音楽界からすると考えられない。全く想定外の事態である。どうしてこのようなことが可能になったのか、音楽と社会のどのような背景がこれを可能としたのか、そこにどのような意味があるのかを明らかにしたいというのが本稿の出発点である。

図1の下部を見ると、「後援・レート本舗 平尾賛平商店」とあり、「お耳にソプラノお手にはソプラ」のキャッチフレーズが白抜きで埋め込まれている。

この「5日連記の広告」は、表1が示すように、9月17日から20日までの4日間、『東京日日新聞』『東京朝日新聞』『都新聞』『時事新報』の4紙に連日掲載された。

表1：5日連記の広告（掲載4紙）

掲載日	紙名	掲載箇所
1929-9-17(火)	東京日日新聞	第19066号 2面 10-13段
1929-9-18(水)	東京朝日新聞	第15579号 3面 4-7段
1929-9-19(木)	都新聞	第15016号 12面 9-12段
1929-9-20(金)	時事新報	第16619号 4面 10-13段

図2：4日連記の広告

1 席数は昭和16年版の大日本音楽協会編『音楽年鑑』による。

最新発売
美と快感の二重奏
肌を養う水
その快き感触！／そのなつかしき清香！／この一滴に心気晴れて／微笑自ら湧き／清快の気あふるる／真にこれ／美と快感との二重奏を／奏づる……音楽的化粧水「特に青年紳士と淑女に／この一瓶を捧ぐ」と添え書きされている。「音楽的化粧水リートソプラ」については後述する。

リートソプラ
大独唱会
高踏音楽の大衆化——リートソプラ発売記念

公演日	会場	開演	入場券
11月9日	京都	19時	前座 100円、本座 150円
11月10日	神戸	19時	前座 100円、本座 150円
11月11日	名古屋	19時	前座 100円、本座 150円
11月12日	横浜	19時	前座 100円、本座 150円
11月13日	大阪	19時	前座 100円、本座 150円
11月14日	東京	19時	前座 100円、本座 150円
11月15日	大阪	19時	前座 100円、本座 150円
11月16日	京都	19時	前座 100円、本座 150円
11月17日	神戸	19時	前座 100円、本座 150円
11月18日	名古屋	19時	前座 100円、本座 150円
11月19日	横浜	19時	前座 100円、本座 150円
11月20日	大阪	19時	前座 100円、本座 150円
11月21日	東京	19時	前座 100円、本座 150円
11月22日	大阪	19時	前座 100円、本座 150円
11月23日	京都	19時	前座 100円、本座 150円
11月24日	神戸	19時	前座 100円、本座 150円
11月25日	名古屋	19時	前座 100円、本座 150円
11月26日	横浜	19時	前座 100円、本座 150円
11月27日	大阪	19時	前座 100円、本座 150円
11月28日	東京	19時	前座 100円、本座 150円
11月29日	大阪	19時	前座 100円、本座 150円
11月30日	京都	19時	前座 100円、本座 150円

図4：全面広告（6回連記）

の水」「リートソプラ」と大書され、さらに「その快き感触！／そのなつかしき清香！／この一滴に心気晴れて／微笑自ら湧き／清快の気あふるる／真にこれ／美と快感との二重奏を／奏づる……音楽的化粧水」「特に青年紳士と淑女に／この一瓶を捧ぐ」と添え書きされている。「音楽的化粧水リートソプラ」については後述する。

演奏会の告知はその下部に配されており、そこにも「ソプラノ大独唱会」「高踏音楽の大衆化——リートソプラ発売記念」とある。さらに一番隅に「当日御来会のA券B券の方へ……おみやげとして」「リートソプラ（一瓶／三十銭）／もれなく進呈いたします」との告知がなされている。主催はリート白粉本舗平尾賛平商店である。

これに類似の全面広告は、11月9日の『山陽新報』にも見られる（図5）。ここでは下部右側に当地での演奏会情報が掲載され、その左に次の告知がある。すなわち、「六大都市に於て満都の人気を沸騰せしめ東京四日間大阪三日間（四回）京都神戸名古屋横浜各一回圧倒的満員を続けた永井女史ソプラノ邦語独唱会は同一の目的方法の下に引続き左記の通り近畿並に西部地方にて催す



図5：全面広告（10回連記）

こととなりました」と前置きして、奈良市（11月10日）、和歌山市（11月11日）、岡山市（11月12日）、高松市（11月13日）、松山市（11月14日）、広島市（11月15日）、福岡市（11月16、17日）、熊本市（11月18日）、大分市（11月19日）と9都市における10回の公演が告知されている。

図5のタイプの全面広告は、演奏会情報に手を加えつつ、『山陽新報』『奈良新聞』『和歌山新報』『香川新報』『愛媛新聞』『九州日報』『福岡日日新聞』『九州日日新聞』『豊州新報』『九州新聞』『大分新聞』の11紙に掲載された。表2は、これらの全面広告の掲載状況をまとめたものである。

加えて、関西の主要新聞には、レイトソプラの囲み広告と「永井郁子女史独唱会」の広告記事とが並置された形でも掲載された（図6）。この並置型の広告が打たれたのは、表3にみるように、『大阪朝日新聞』『神戸又新日報』と『京都日出新聞』の3紙の4回である。

これらの広告に加えて、新聞各紙には事前の予告記事や小さな囲み広告、また時には写真入りの報告記事が掲載されており、それらから1929年秋の演奏旅行の実態がおおよそ浮かび上がってくる。まずはそこから整理しておこう。

表 2 : 全面広告 (掲載12紙)

掲載日	紙名	掲載箇所	詳細告知された独唱会
1929-9-23(月)	大阪朝日新聞 (図 4)	第17190号 7面	大阪 (9/27, 28, 29) 神戸 (10/1) 京都 (10/2)
1929-11-9(土)	山陽新報	第16812号 8面	岡山 (11/12)
1929-11-10(日)	奈良新聞	第10998号 4面	奈良 (11/10)
1929-11-10(日)	和歌山新報	第11600号 4面	和歌山 (11/11)
1929-11-11(月)	香川新報	第12803号 4面	高松 (11/13)
1929-11-12(火)	愛媛新聞	第13089号 8面	松山 (11/14)
1929-11-12(火)	九州日報	第14057号 5面	福岡 (11/16, 17)
1929-11-14(木)	福岡日日新聞	第16561号 8面	福岡 (11/16, 17)
1929-11-14(木)	九州日日新聞	第15404号 8面	熊本 (11/18)
1929-11-15(金)	豊州新報 (図 5)	第10036号12面	大分 (11/19)
1929-11-16(土)	九州新聞	第8440号 8面	熊本 (11/18)
1929-11-16(土)	大分新聞	第10984号12面	大分 (11/19)



図 6 : 並置型の広告

表 3 : 並置型の広告 (掲載 3 紙 4 回)

掲載日	紙名	掲載箇所
1929-9-27(金)	大阪朝日新聞	第17193号 3面5-8段
1929-9-29(日)	大阪朝日新聞	第17195号 3面10-13段
1929-9-30(月)	神戸又新日報	第15606号 2面3-6段
1929-9-30(月)	京都日出新聞	第15302号 2面9-12段

3. 一連の演奏会

永井郁子は1929年7月に『邦訳歌詞問題の前後 転機 反響篇』（噴泉堂）を出版し、巻末の「永井郁子邦語独唱会年表」に第200回（1929年5月26日）までの独唱会の会場、年月日（昼夜の別）と共演者を列挙している。しかし、その後については継続的な記録はないので、新聞や雑誌の記事から拾い上げていく他ない。

表4は、これまでの調査で分かった範囲で、1929年秋のレート白粉本舗平尾賛平商店とタイアップして開催した邦語独唱会を一覧としてまとめたものである。

表4：1929年秋のレート演奏会一覧

No.	日時	都市	会場	出典 ³
試唱	9/5、夕	大阪	美津野運動具店	大阪毎日
	9/7、夜	名古屋	愛知県立第一高等女学校講堂	新愛知 ⁴
試唱	9/14、昼	東京	東京会館	東京日日 東京小間物化粧品商報
1	9/21、夜	東京	大隈会館	東京日日、東京朝日、都、時事新報
2	9/22、夜	東京	青山会館	同上
3	9/23、夜	東京	報知講堂	同上
4	9/24、夜	東京	本所公会堂	同上
5	9/25、夜	横浜	横浜会館	同上
6	9/27、夜	大阪	中央公会堂	大阪朝日
7	9/28、夜	大阪	中央公会堂	同上
8	9/29、昼	大阪	朝日会館	同上
9	9/29、夜	大阪	朝日会館	同上
10	10/1、夜	神戸	青年会館	神戸又新
11	10/2、夜	京都	京都市公会堂	京都日出

3 紙名については「新聞」を省略している。

4 「新愛知新聞音楽部主催、レート化粧品本舗後援」で、来会者には「新商品レートソプラを一瓶ずつ呈上」と告知されている。

17	11/10、昼	奈良	奈良公園公会堂	奈良 大阪朝日奈良版
18	11/11、夜	和歌山	公会堂	和歌山新報
19	11/12、夜	岡山	市公会堂	山陽新報
20	11/13、昼	高松	内町聚楽座	香川新報
21	11/13、夜	同上	同上	同上
22	11/14、夜	松山	松山高等学校講堂	愛媛
23	11/15	広島	?	
24	11/16、夜	福岡	仏教会館	福岡日日、九州日報
25	11/17、昼	同上	同上	同上
26	11/17、夜	同上	同上	同上
27	11/18、夜	熊本	市公会堂	九州、九州日日
28	11/19、夜	大分	県公会堂	大分、豊州新報

表4に見るように、9月下旬から10月上旬にかけて、東京（4回）、横浜、大阪（4回）、神戸、京都の計11回の独唱会をほぼ連続する12日間で行い、その後、11月中旬に奈良、和歌山、岡山、高松（2回）、松山、広島、福岡（3回）、熊本、大分の計12回の独唱会を連続する10日間で行っている。この日程の密度と地理的な広がり、目を見張らせる。

このように前期（9月下旬から10月上旬）の11回と後期（11月中旬）の12回の合計23回の独唱会開催が判明している。

一方、広島については日程は分かっているが、会場等の詳細が判明しない。『中国新聞』と『大阪朝日新聞広島版』を調査したが、不思議なことに関連記事を見出すことができなかった。11月15日付『中国新聞』12701号6面1-5段には永井郁子の「音楽随筆」が掲載されたので、続報が期待されるところだが、その後の音楽記事は「主催広島琵琶同好会、後援中国新聞社」の「豊田旭穂女史歓迎琵琶会」一色に染まっており、そちらが優先されたものと思われる。

なお、この前期と後期との間で、10月6日には新潟で昼夜2回の独唱会を行っているが⁵、それらは新潟高等女学校母校会の主催であって、平尾賛平商

5 1929年9月17日付『新潟新聞』第4777号4面4-5段「永井郁子女史／独唱会／プログラム」に曲目一覧が、10月9日付の同紙第4799号5面3-5段に演奏会評「楽評／永井女史の独唱会／雷鳥ます美」が掲載されている。

店の主催ないし後援ではないので、表4からは除外している。

永井自身が作成した「邦語運動重要年表」には、「昭和四年九月廿一日・ヨリ東京四回・横浜一回・大阪四回其他神戸京都等西部大都会ニテ連続二十八回ノ邦語独唱会ヲ催ス。何レモ圧倒的大盛況ヲ呈ス。平尾賛平商店主催ナリ」(永井1929, 巻末付録, 3)の記載があり、1929年秋の平尾賛平商店とのタイアップによる独唱会は28回であったことが知られるが、現状で判明しているのは上記の23回であり、残り5回については課題が残っている。

4. 演奏曲目

これらの独唱会における演奏曲目として、最も一般的なものを「プログラム例1」として次に掲げる。この「小夜楽三曲」「子守唄三曲」「各国名謡六曲」「新箏歌謡曲三つ」「義太夫曲三つ」の組み合わせは、京都(10/2)、和歌山(11/11)、高松(11/13)、松山(11/14)、福岡(11/16)、熊本(11/18)、大分(11/19)の演奏会告知で用いられたものである。右欄の細目は、各地の演奏会で実際に歌われた曲名を順不同でまとめて掲載している。

プログラム例1

No.	番組	細目
1	小夜楽三曲	シューベルト、グノー、トステイ
2	子守唄三曲	ブラームス、モーツァルト、シューベルト
3	各国名謡六曲	日本〈菊〉〈四つ葉のクローバ〉〈野ばら〉〈ベチカ〉 満州〈娘娘祭〉 露国〈東方のロマンス〉 独国〈折ればよかった〉〈紡ぎ歌〉〈ローレライ〉 〈われ御身を愛す〉〈ホフマンの船唄〉 英国〈埴生の宿〉〈いとしきジョニイ〉〈故郷の廃家〉 米国〈スワニー河〉 仏国〈悲歌〉 伊国〈サンタルチア〉〈あわれふたたび〉〈ニーナの死〉 諾国〈ソルベイグの唄〉 拉〈アヴェマリア〉
4	新箏歌謡曲三つ	〈コスモス〉〈唐松は〉〈うわさ〉〈紅さうび〉〈若水〉 〈せきれい〉
5	義太夫曲三つ	〈馬子唄〉〈御詠歌〉〈朝顔の歌〉〈巡礼歌〉〈木遣歌〉

このように、3曲ずつ（時に6曲）を単位として番組が組まれている。「小夜楽三曲」はシューベルト、グノー、トスティ、「子守唄三曲」はブラームス、モーツァルト、シューベルトが定番であるが、「各国名謡六曲」については、上記のレパートリーの中から適宜選んで組み合わせられている⁶。「新箏歌謡曲」は宮城道雄（1894～1956）の作曲による歌曲で、1926年秋から各地で歌っているものである（津上 2020）。「義太夫曲」は永井郁子自身の考案によって前年の1928年から取り組んでいるジャンルである。

幸いなことに、大阪音楽大学の音楽記事集成⁷に大阪公演のプログラムの写真が収められており、大阪公演4回の演奏曲目の詳細を知ることができる。あいにく東京公演4回のプログラムは見出せていないが、「毎日曲目変更」という点で、この大阪公演4回と同様の組み方をした可能性が考えられる。

これらの大阪のプログラムでは、「長唄・新民謡」として杵屋佐吉（1884～1945）作曲の〈明の鐘〉〈峠〉〈踊らうよ〉〈みかん山〉が加えられているのが注目される。杵屋佐吉との協働も前年の1928年秋にスタートしたもので（津上 2018, 94）、永井にとっては義太夫曲と並ぶ最も新しいレパートリーであった。

一方、10月1日の神戸公演では「ベートーヴェン三曲」「シューベルト三曲」

第一日（1929-9-27、中之島中央公会堂）

No.	番組	細目
1	ベートーヴェン三曲	〈いとしきジョニー〉〈御身を愛す〉〈神のみいづ〉
2	子守唄三曲	ブラームス、モーツァルト、シューベルト
3	各国名曲六曲	日〈ペチカ〉、支〈娘娘祭〉、露〈東方のロマンス〉、独〈折ればよかった〉、仏〈悲歌〉、拉〈アヴェマリア〉
4	長唄・新民謡	〈明の鐘〉〈踊らうよ〉〈みかん山〉
5	新箏歌謡曲	〈紅さうび〉〈若水〉〈せきれい〉

6 これは朝鮮演奏旅行におけるのと同じシステムである（津上 2019a, 50）が、曲目には異同が見られる。

7 大阪音楽大学に付設されていた楽器博物館で収集・保存された明治期以来の関西圏の音楽関係記事集成。現在は同校のミュージック・コミュニケーション専攻で管理されている。

第二日（1929-9-28、中之島中央公会堂）

No.	番組	細目
1	シューベルト三曲	〈子守唄〉〈鮎〉〈野ばら〉
2	小夜楽三曲	シューベルト、グノー、トステイ
3	各国名曲六曲	英〈埴生の宿〉、米〈スワニー河〉、伊〈サンタルチア〉、独〈ローレライ〉、独〈紡ぎ歌〉、諾〈ソルベイグの唄〉
4	新箏歌謡曲	〈コスモス〉〈唐松は〉〈うわさ〉
5	義太夫曲	〈馬子唄〉〈御詠歌〉〈朝顔の歌〉

第三日（1929-9-29、14時、大阪朝日会館）

No.	番組	細目
1	小夜楽三曲	シューベルト、グノー、トステイ
2	子守唄三曲	ブラームス、モーツァルト、シューベルト
3	各国名曲六つ	日〈菊〉〈四つ葉のクローバ〉〈野ばら〉、支〈娘娘際〉、露〈東方のロマンス〉、独〈折ればよかった〉、独〈紡ぎ歌〉、拉〈アヴェマリア〉
4	長唄・新民謡	〈峠〉〈踊らうよ〉〈みかん山〉
5	義太夫曲	〈馬子唄〉〈御詠歌〉〈朝顔の歌〉

第三日（1929-9-29、19時、大阪朝日会館）

No.	番組	細目
1	シューベルト 〔七曲〕	《冬の旅》より〈凍えし涙〉〈菩提樹〉〈春の夢〉〈駅通〉〈老楽手〉／〈子守唄〉〈野ばら〉
2	各国名曲八曲	英〈いとしきジョニー〉、独〈われ御身を愛す〉、伊〈あわれふたたび〉、伊〈ニーナの死〉、独〈ホフマンの船唄〉、諾〈ソルベイグの唄〉
3	長唄・新民謡	〈明の鐘〉〈峠〉〈踊らうよ〉〈みかん山〉
4	義太夫曲	〈巡礼歌〉〈木遣歌〉〈朝顔の歌〉

「各国名曲七種」「新箏歌謡曲六種」とやや変則的な構成になっている。港町で外国文化に明るい土地柄に合わせて変えたものであろう。

11月17日の福岡公演も、「ヴォルフ三曲」「シューベルト三曲」「各国名謡六曲」「新箏歌謡曲三つ」「義太夫曲三つ」と作曲家名を前面に出した番組となっている。公演先の土地柄や音楽的な興味に配慮したものと考えられる。

5. 共演者

永井郁子の邦語歌唱運動は、新しい日本語の歌を目指すものとして、箏曲や義太夫の音楽家との協働を含んでいたもので、それらを演奏するには共演者が必要であった。普通の歌曲のリサイタルであれば、ピアノ伴奏者が一人いれば事足りるが、永井の場合にはそう簡単には行かない。箏や尺八、三味線を奏する共演者の確保が急務であった。

表5は、1929年秋の共演者を一覧にまとめたものである。

表5：永井郁子の1929年秋の共演者一覧⁸

月日	会場	箏 ⁹	尺八	三味線 ¹⁰
9-5夕	大阪、美津野運動具店	菊田歌雄	星田一山	杵屋富美 杵屋愛子
9/7夜	名古屋、愛知県立第一 高等女学校講堂	野坂操壽	廣門怜風	—
9-14	東京、東京会館	—	—	豊澤猿之助 豊澤芳太郎
9-21	東京、大隈会館	野坂操壽* 松島禮子	廣門怜風	ヴァイオリン： 前田璣
9-22	東京、青山会館	—	—	豊澤猿之助 豊澤芳太郎
9-23	東京、報知講堂	—	—	杵屋佐吉 杵屋佐次郎
9-24	東京、本所公会堂	宮城道雄 吉田恭子*	吉田晴風	—
9-25	横浜、横浜会館	野坂操壽	廣門怜風	ソプラノ： 橋本花子

8 ここでは紙幅の都合でピアノ伴奏者を割愛した。ピアノ伴奏者は、東京の2日間（9月22日と23日）は黒川たか子が加わったが、それ以外は一貫して藤井光子であった。

9 「箏」の欄でアスタリスク（*）をつけたのは箏三弦の奏者。

10 長唄三味線と義太夫三味線に加えて、その他の奏者もこの欄に含める。「三味線」の欄でアスタリスク（*）をつけたのは箏の助奏者。

9-27夜	大阪、中央公会堂	菊田歌雄* 菊峯市野	星田一山	杵屋佐次郎 杵屋佐三郎 杵屋登美子? ¹¹ 杵屋あい子?
9-28夜	同上	菊田歌雄* 菊峯市野	星田一山	豊澤猿糸 豊澤猿若*
9-29昼	大阪、朝日会館	—	—	杵屋登美子 杵屋あい子 豊澤猿糸 豊澤猿若*
9-29夜	同上	—	—	同上
10-1	神戸、基督教青年会館	菊田歌雄* 菊峯市野	小池玲山	—
10-2	京都、市公会堂	萩原正吟	大橋鴻山	豊澤猿糸 豊澤猿若*
11-10	奈良、公会堂	萩原正吟	大橋鴻山	豊澤猿糸
11-11	和歌山、公会堂	菊晴静枝	岩橋恩山	豊澤猿糸
11-12夜	岡山、市公会堂	渡谷琴恵	虫明圭山	豊澤猿糸
11-13昼	高松、聚楽座	渡谷琴恵	虫明圭山	豊澤猿糸
11-13夜	同上	渡谷琴恵	虫明圭山	豊澤猿糸
11-14	松山、松山高等学校	加藤豊栄	中西窓山	豊澤猿糸
11-15	広島	?	?	?
11-16	福岡、仏教青年会館	坂本歌津子	松岡泉山	豊澤猿糸
11-17昼	同上	坂本歌津子	松岡泉山	豊澤猿糸
11-17夜	同上	坂本歌津子	松岡泉山	豊澤猿糸
11-18夜	熊本、市公会堂	坂本歌津子	松岡泉山 藤田把山	豊澤廣二 豊澤猿糸
11-19	大分、県公会堂	坂本歌津子	菊池當山	豊澤廣二

共演者の内、東京の野坂操壽（初代、1905～2002）と京都の萩原正吟（1900～1977）は腕の立つ若手奏者であり（倉田 2008, 中 241, 261）、大阪の菊田歌雄（初代、1879～1949）は大阪相愛高等女学校と大阪盲学校の教諭（同書, 中 281）、福岡の坂本歌都子¹²（1904～1984）は「生田、山田等を総合し全日本音

11 新聞広告では杵屋登美子と杵屋あい子とされているが、大阪音楽大学が所属する演奏会当日の配布プログラムには杵屋佐次郎と杵屋佐三郎の名前がクレジットされている。

12 新聞ではいずれも歌津子となっている。

楽を楽譜に依つて統一するいふ大抱負を以て生れし統一流」(同書, 下 390) と、各地の実力者で進取の気性に富む奏者が共演者を務めている。

また、大阪の星田一山(1894~1968)は「未成社を組織して尺八独奏曲及び尺八を主奏とする新合奏曲を研究の主題」(同書, 中 163)とし、京都の大橋鴻山(1895~1968)¹³は都山流京都幹部会幹事長(同書, 中 167)、岡山の虫明圭山(1901~1990)は都山流岡山幹部会会長(同書, 下 368)と、尺八奏者も同様である。

一方、大阪から九州各地まで、数多くの公演で共演した義太夫節の豊澤猿糸(5代目、1878~1957)は撥音の高さで人々を驚かす腕前の持ち主であったが、「一時文楽座を退き商売の見習をしたり銀行にも勤務したり」(同書, 中 397)という変わり種であった。11月16日付『九州日報』第14061号3面3-4段の告知記事でも、「尚当日は大阪より義太夫界の鬼才豊澤猿糸氏が来福し助出演する筈」と報道されている。

6. 会場と聴衆

会場の設営や公演の運営は、各地の化粧品店有志の協力によって担われた。11月21日付『豊州新報』第10042号2面の報告記事では、「当日会場はレート化粧品代理店頭師商店、加賀屋商店を始め市内化粧品商店有志の斡旋にて遺憾なく整へられた」、また「定刻柏木レート本舗出張員は満場の拍手を浴びて登壇、挨拶を兼ねて永井女史招聘独唱会開会の主旨を述べ直ちにプログラムに移る」と報じられており、レートの関係者によって取り仕切られていたことが明らかである。

切符の売り捌きについては、11月16日付『九州日報』第14061号3面3-4段の告知記事が「当日の混乱を避くるため、市内主なる楽器店、書籍店、化粧品販売店等で入場券の前売をしてゐると」伝えている。

1929年秋の永井郁子のレート演奏旅行は、上述のように各地の大会場を網羅

13 大橋鴻山および虫明圭山の没年については、公益財団法人 都山流尺八楽会 事務局長の藤田天山氏にご教示頂いた。

する形で行われたが、一体どれほどの集客があったのだろうか？聴衆の様子を伝える記事から考えてみたい。

まず、1929年9月28日付『東京小間物化粧品商報』¹⁴ 第1447号25頁に「永井郁子女史邦語独唱会」の写真2点¹⁵と「レートソプラ愛用者優待の音楽会」の実施報告記事があって、次のように伝えている。

初日は朝からの蕭条たる秋雨に、何かとも思はれたにも拘らず、聴衆は雨を冒して押寄せ青山会館、報知講堂の如きは、あたかも日曜、祭日続きであつたので、何づれも鉢切れるばかりの満員、入場し切れずして足を空しくした人もかなりあつた[。]本所の公会堂にしても立錐の余地もない入りで、花やかにも賑やかな場面を見せた。

ここから、東京の会場は何れも大入りであったことが分かる。この記事は、大阪・神戸・京都の公演予定に触れて「業界最近の変つた計画といふ可きであらう」と結んでいる。

岡山（11/12）については、11月13日付『山陽新報』第16816号7面の報告記事が「満場の聴衆から喝采の雨を」の見出しをつけて、舞台後方から会場を俯瞰した写真を掲載していて、文字通りびっしりの聴衆が見える。

松山（11/14）については、11月16日付『愛媛新聞』第13294号4面7-8段の記事「昨夜永井郁子女史の独唱会」が「入場者堂にあふれ」と告げて会場と舞台の俯瞰の写真（2段抜）を掲載しているが、客席には幾分余裕がある。

福岡（11/16, 17）については、『九州日報』¹⁶ が報告記事を連日掲載し、「昼

14 明治25年設立の東京小間物卸商組合が明治28年から発行した組合機関紙で、明治36年に東京小間物化粧品卸商組合に名称変更したのに伴って『東京小間物化粧品商報』と改称された。東京化粧品工業会ホームページの資料館 (<http://www.tga-j.org/documents/>) で公開されていて閲覧できる。

15 「青山会館に於けるその夜の聴衆とステージに立てる永井女史」のキャプション付き。

16 1929年11月17日付『九州日報』第14062号8面10-11段、
1929年11月18日付『九州日報』第14063号7面6-10段。

夜共満員の大盛況」に会場写真（3段抜、天井からレート化粧品のバナー多数）を添え、『福岡日日新聞』¹⁷も夜の部の会場写真（2段抜）を掲載している。いずれも会場後方まで聴衆がびっしり詰めかけている様子が見て取れる。

熊本（11/18）については、1929年11月20日付『九州日日新聞』に「三千の会衆を恍惚と音律の妙に酔はした」との報告記事があり、プログラムの歌詞を見ながらモーツァルトの演奏に聞き入る客席の女性たちの様子が見て取れる写真（2段抜）が添えられている。

大分（11/19）については、11月21日付『大分新聞』第10989号9面が「開会一時間も前から伴内務部長、本山知事夫人をはじめ市内好楽家、学生の群れでホールは埋まつて仕舞ひその数千二百、大盛況だ」と舞台写真を添えて報告すると共に、「女史にとつては一年八ヶ月振りのなつかしい県公会堂のステージである、楽壇の明星を迎へる聴衆の喜びは嵐のやうな拍手とかはり、早くもなごやかな音楽会のアトモスフィアは全堂を包んで仕舞つたのであつた」と珍しく開演時の会場の雰囲気伝えてる。同日の『豊州新報』¹⁸にも舞台写真（1.5段抜）と会場写真（2段抜）が掲載されており、それを見ると「開会前早くも満員立錐の余地なき盛況ぶり」という報道が誇大ではないことが実感できる。

以上から、東京の公演を始め、九州各地に至るまで、ほとんどの会場で大入り満員であったことが確認されたが、この集客力は驚異的と言ってよい。

7. 交通

この演奏旅行は、短期間に広範な地域で連続的に演奏会を行う点で際立っており、当時の交通事情でこれを実現することが可能だったのかという疑問が湧いてくる。

そこで当時（1929年9月改正）の時刻表¹⁹を見ると、横浜から大阪まで約10

17 1929年11月17日付『福岡日日新聞』第16564号3面4-5段。

18 1929年11月21日付『豊州新報』第10042号2面5-9段。

19 三菱信託株式会社大阪支店発行の『汽車時刻表（昭和四年九月改正）』と、三井銀行若松支店発行の『汽車時間表（昭和四年九月）』を参照した。

時間半かかっている（10時35分横浜発の特急寝台で20時52分大阪着）。奈良から和歌山までは約4時間半（奈良から桜井線で王子まで1時間20分、王子から和歌山線で和歌山まで3時間3分）、大阪から岡山まで急行寝台で約3時間半（9時46分大阪発で13時16分岡山着）、広島から福岡まで約9時間（23時30分広島発の寝台列車で5時20分下関着、8時35分博多着）の長時間移動であった。熊本から大分へは前年の1928年に豊肥本線が開通していたが、全長148キロの山越えでスイッチバックを繰り返すので時間がかかった²⁰。何れにしてもきつい旅程である。これをこなした体力と気力には並々ならぬものがある。

演奏旅行の苦労については、1931年10月22日付『福岡日日新聞』第17262号5面5-10段「宿屋のはなし二三、きのふ福岡に来た永井郁子女史の談」が興味深い。この中で永井は、「『旅館の機嫌は其の地滞在中の感情を支配する』といつたトーマス、クツク氏の言葉は当たつてゐます」と前置きした上で、旅館での悩みの種として、旧式の便所、風呂、女中達、食事について語っている。その中で、「汽車の疲れで寝てゐるものを、夜が明けたとて遠慮会釈もなく雨戸をがらがら開け放して安眠妨害をするのも東北旅館でなければ出来ぬ景物」と述べていて、強行軍の演奏旅行で列車による長時間の移動が体に負担になっていたことを漏らしている。談話中で実際に泊まった宿として博多の栄屋、京都の柘屋の名が上がっており、一流旅館を使つての演奏旅行であったようだ。

8. 平尾賛平商店

この演奏旅行のスポンサーであった平尾賛平商店は、1878（明治11）年に平尾賛平（初代、1846～1897）によって創業され、「後に“レート²¹”商標で明治、大正、昭和のトップブランド」（水尾1998、37）となった化粧品会社である。

2代目の平尾賛平（1874～1943）は明治39年に乳白化粧品水レートを製造発売

20 昭和5年10月1日改正の汽車時刻表復刻版によると、9時30分熊本発509便で15時8分大分着なので所要5時間38分。立野と豊後竹田で駅弁の販売があった。

21 レートは平尾賛平商店のブランド名で、フランス語の「lait（ミルク）」から考案された名称である。

し、劇場とタイアップしてプログラムに広告を刷り込んで配布したり、レート観劇会を組織して人気俳優愛用品としてのレート化粧品を会員に頒布したりと、目覚ましい宣伝活動を展開した（広告変遷史刊行会 2008, 135）。大阪の中山太陽堂の「クラブ化粧品」と覇を競い、「東のレート、西のクラブ」と並び称されたが、戦後の1954（昭和29）年に廃業した。

9. 化粧品レートソプラ

化粧品レートソプラは、レート白粉本舗が1929年秋に発売した新商品である²²。上記の6回連記の広告に、「肌を養ふ美の水レートソプラ」「一瓶（金三十銭）」「レートソプラはレート本舗の新発売になる『美と快感の二重奏』を奏する音楽的化粧水で現代人の感覚にピッタリあつた化粧水として熱狂的好評を博してゐます」と謳われている。

この「音楽的化粧水レートソプラ発売記念」と銘打たれたのが、1929年秋の永井郁子の演奏旅行であった。同じく6回連記の広告では、「世界のあらゆる佳き歌を日本の言葉で歌う」「高踏音楽の大衆化！世界名曲の邦語独唱！洋楽の正しい音階にのせられた日本古典音楽！」といったキャッチフレーズが繰り返され、さらに『日本人は日本の言葉で唱ひませう』をモットウとして雄々しくも楽壇の尖端に立つた天才声楽家、ソプラノの第一人者永井郁子女史の芸術運動を援けるためにソプラノ大独唱会を催します」と主催の主旨が述べられている。

また、上記の5回連記の広告では、「お耳にソプラノお手にはソプラ」の謳い文句が目目を引いた。「ソプラ sopra」はイタリア語で「上の、より高い」という意味で、ソプラノは最上声部を意味する。化粧品の名称として付加価値を感じさせる語であり、これを化粧水の名に冠するのは理に適っている。

22 平尾賛平は1929年に『平尾賛平商店五十年史』を出して、自社の歴史や商品について詳述したが、1929年3月に出版されたものなので、同年秋発売のレートソプラに関する記述は残念ながら含まれていない。

10. 化粧品会社の広告と音楽

化粧品広告が新聞に出始めたのは明治11年で、平尾賛平商店の「おしろい下小町水」が嚆矢とされる（瀬木 1955, 36）。初代から新し物好きであった。また「明治44年11月3日の天長節を祝して出した広告は、少女がヴァイオリンを弾く図を入れたもので、当時としてはモダンな広告であった」（同書、83）という。レートは早くから洋楽の持つモダンな雰囲気に着目して広告に活かす取り組みをしていたことが知られる。

大正期に入ると、「クラブ対レートの新聞広告戦」が展開された。レートは、「愛用者優待のレート会を設け、帝劇でトスカが上演するや、川上貞奴の話をのせるなど、トピックスを巧みに広告に使用」（同書、123）するなど、先駆的な宣伝方法を次々と繰り出していった。

昭和初期は映画、演劇が盛んになり、それに伴って化粧品広告は映画女優の写真を多用するようになった。この時期、「レート化粧品も『クレーム』の外、『固煉白粉』『ポマード』、化粧水『レートソプラ』等を盛んに宣伝」（同書、170）したとあり、レートソプラの宣伝が広告業界人の印象に残っていたことが窺われる。

レートの番頭であった勝田重太郎（1887～1967）は、1939年の「化粧品と広告」の中で、広告は「商店の人格」であるから、「堂々たる広告であり、堂々たる宣伝方法であれば、その店の人格を益々向上せしめ、その店の信用を弥が上に増す事となります」（同書、161）と位置付けている。その上で、広告は「一味新鮮な感触を与える事が必要」であり、「如何なる事が現代の人に最も深刻な印象を与へるか、如何なる事が、最も強い感激力をもつて居るか、又迅速なる共鳴をそそるか」が肝心で、「現代人の心の琴線を掻き鳴らし、そこに強大な感動を起こさしめる独創的な工夫、これが即ち新味で、広告が『芸術に非ざる芸術』といはれるのは此点にある」（同書、164）と力説している。

1929年秋の永井郁子の邦語独唱会のバックアップも、こうした企業理念に沿って企画・実行されたものと考えられる。

実行にあたっては入念な準備が行われた。まず、大阪と東京で試演会が行われた。大阪では9月5日「午後四時から大阪東区淀屋橋南詰美津野運動具店八階で声楽家永井郁子女史の新しい試み——洋楽化された日本音曲の発表試唱会」²³ があって、「来会者百余名、菊田歌雄女史（箏）星田一山氏（尺八）の伴奏で宮城道雄氏作曲の歌謡三つ、杵屋富美、愛子両女史の伴奏で杵屋佐吉氏曲の小品民謡三つの後に義太夫」2曲が演奏された。

東京では9月14日「午後二時から丸の内の東京会館に催された。聴衆二百名、芸術家、教育家、詩人、小説家、新聞人、実業家等、とても珍しい顔触れの人々を網羅した、業界からは平尾賛平氏夫妻、平尾賛之輔氏等が見えた」とあり、執筆者の「村人」氏は「平尾さんから誘われ」て聴きに行った旨を記している²⁴。東京では「歌曲五篇」として、義太夫の〈御詠歌〉と〈朝顔の歌〉、杵屋佐吉作曲の〈峠〉〈踊らうよ〉〈みかん山〉が披露された。

明確な理念に基づいて入念に準備されたキャンペーンとして、「音楽的化粧品レートソプラ発売記念永井郁子女史邦語大独唱会」は各地で成功を収めることができた。そこには各地域の化粧品店と愛用者を組織したレート会のネットワークが強力に働いていたものと考えられる。それらを起動するために新聞広告が積極的に活用されたのは、本稿で見てきた通りである。

11. おわりに

1929年9月15日付『報知新聞』第18921号4面の「優良商品漫画探訪」において、「邦語独唱をモットーとする或る日の永井郁子女史」がイラスト入りで描かれたが、同じ紙面で取り上げられているのは「楽屋の市川猿之助丈²⁵」と「栗島すみ子²⁶とチョコレート」である。ここから、永井郁子が歌舞伎俳優や映画女優と並ぶ知名度を持っていたことが知られる。レートはこの永井の知名

23 1929年9月6日付『大阪毎日新聞』第16639号7面。

24 1929年9月21日付『東京小間物化粧品商報』第1446号25面。

25 2代目市川猿之助（1888～1963）。

26 日本映画界初期の人気女優（1902～1987）。

度を活用して新商品の宣伝を行った。一方、永井は、レートネットワークを通じて、従来以上に広い聴衆層を得たものと考えられる。

その後、永井は1931年12月に「青森県凶作地方救済の義援金募集」として京橋公会堂（12/24）、青山会館（12/25）、本所公会堂（12/26）、日比谷公会堂（12/27）で4日連続の独唱会を行った際にもレート化粧品本舗の後援を得た（津上 2018, 97）。青森出身学生の募金運動を成功させるべく、レートの力を借りたものであろう。

企業の広告史において、冠コンサート等の音楽イベントは、1969年から74年が導入期、1975年から79年が成長期、80年以降が発展期とされるが（林 1984, 201）、1929年秋の「音楽的化粧品レートソプラ発売記念永井郁子女史邦語大独唱会」はその動きを40年ほど先取りしたものであり、極めて先駆的な例と位置づけることができる。

参考文献：

- 勝田重太郎 1939 「化粧品と広告」大阪広告倶楽部同人編『新聞広告の研究』東京：日本電報通信社 155-175.
- 角南浩 1983 「化粧品広告の四天王（上）平尾賛平と福原信三」『広告』24(2) (237) 43-47.
- 倉田喜弘監修・解説、林淑姫編集・解題 2008 『昭和前期音楽家総覧：現代音楽大観』（全3巻）東京：ゆまに書房
- 広告変遷史刊行会（編）2008 『写真記録 日本広告史』東京：日本図書センター
- 瀬木博信 1955 『広告六十年』東京：博報堂
- 大日本音楽協会（編）1941 『音楽年鑑』東京：共益商社
- 津上智実 2018 「朝日新聞データベース『聞蔵Ⅱ』に見るソプラノ歌手永井郁子（1893～1983）」『神戸女学院大学論集』65-2：83-100.
- 津上智実 2019a 「『釜山日報』『朝鮮新聞』『毎日申報』に見るソプラノ歌手永井郁子（1893～1983）」神戸女学院大学女性学インスティテュート『女性学評論』33：41-68.
- 津上智実 2019b 「読売新聞データベース『ヨミダス歴史館』に見るソプラノ歌手永井郁子（1893～1983）」『神戸女学院大学論集』66-1：45-59.
- 津上智実 2020 「永井郁子と宮城道雄～共演の実態と意義～」『神戸女学院大学論集』

67-1 : 97-114.

- 東京小間物化粧品商報社『東京小間物化粧品商報』 東京：東京小間物化粧品商報社
永井郁子 1929 『邦訳歌詞問題の前後，転機，反響編』 東京：噴泉堂
林進、小川博司、吉井篤子 1984 『消費社会の広告と音楽』 東京：有斐閣
平尾賛平商店 1929 『平尾賛平商店五十年史』 東京：平尾賛平商店
水尾順一 1998 『化粧品のブランド史』 東京：中央公論社
宮内寒弥 1965 「広告人列伝4：平尾賛平」『電通広告論誌』 41, 96-104.

(本研究は JSPS 科研費 JP18K00155 を受けたものです)